
暗いへや

ましろ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

暗いへや

【Nコード】

N4055F

【作者名】

ましろ

【あらすじ】

『わたし』のいる部屋にはいつも色々な人が訪ねてくる。『わたし』はいつも待っている。そう、待っている。それが何かは分からない。けれど、きっと分かるときが来る。そんな気がするの。

わたしは窓から外を眺めていた。
今日はどんなお客さまがくるだろう。
わたしは不安で胸がいつぱいになった。

からん ころん。

やわらかなベルの音がして、わたしはそちらを向いた。
やさしそうなおじさんだ。わたしはすこし、安心した。

。 んろこ んらか

。 たい向をらちそはしたわ、てしが音のルベなからわや
。 たし心安、しこすはしたわ。 だんさじおなうそしさや

わたしは静かに外をみていた。
今日はどんなお客さまがくるだろう。
わたしはとつぜん、悲しくなった。

からん。

小さなベルの音がして、わたしはそちらを向いた。
悲しそうな女の人だ。わたしと同じ顔をしている。わたしは静かに
涙をこぼした。

。 んらか

。たい向をらちそはしたわ、てしが音のルべなさ小
。たしぼこを涙にか静はしたわ。るいてしを顔じ同としたわ。だ人
の女なうそし悲

わたしは静かに窓をみていた。

なにか忘れてしまっている気がして、とてもきもちがわるい。

今日はお客さまに来てほしくないな、と思った。

からん ころん からん。

かわいらしいベルの音がしたけど、わたしはふいつと顔をそらした。
するとお客さまはこちらへ回った。白い子猫だった。

わたしがびっくりしていると、白い子猫は銀のナイフに変化した。

わたしは全てを悟った。

それに呼応するかのように、銀のナイフは白く光った。

わたしはまるい月と挨拶していた。

今日はどんなお客さまがくるだろう。

わたしは白く光るナイフを取り出した。それは決意するかのように、
きらりと光った。

がらん ころん がらん。

目を赤くした男の人が飛び込んできた。手に持った包丁には、な

にか赤いものがついていた。

わたしはその人のおなかに、勢いよくナイフを突き立てた。

わたしのおなかからあふれ出す赤いものは、まるいお月さまを赤く色づけていた。

-
-
-

少女の殺された地下室で、少女を殺した男は冷たくなっていた。

暗い地下室の窓をじっと睨むように倒れた男の腹に、銀のナイフがぼんやりと白く光っていた。

(後書き)

バットエンドでハッピーエンドに仕上げてみました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4055f/>

暗いへや

2011年1月19日15時37分発行